

理数系創作料理的音楽人生

ジャズとエレクトロニクスを共存させ

伝統と先鋭を股にかけ独自のキャラクターを放つ

ピアニスト&シンセシスト、クリエイター

応用物理学科 S62 (1987) 年卒業

つぼ ぐち まさ やす
坪口 昌恭

尚美学園大学・大学院ジャズ&コンテンポラリー分野 主任教授
早稲田大学オープンカレッジ 講師

【略歴】

- S39 (1964) 年 武生市 (現 越前市) に生まれる
- S42 (1967) 年 母のオペレッタで感動、大泣き
3歳、即興で作曲し歌唱
小学校コンサートで舞台上に駆け上がり指揮
- S45 (1970) 年 京都へ引っ越し
さらに大阪へ引っ越し、PL学園小学校に入学
- S52 (1977) 年 中学でPL学園吹奏楽部に入部
- S57 (1982) 年 帰郷、北陸高校に転入
- S58 (1983) 年 福井大学工学部応用物理学科に入学
- S62 (1987) 年 大学卒業、上京
(以下、本文末尾)



編集にあたって

昨年11月22日に福井で音楽フェス“JAZZ井(ジャズイ)”が開催された。15時開演に始まり、19時半まで、1,200人の観客は庭園の紅葉とジャズ、晩秋の夕べを酔いしれた。県立音楽堂初のワインバーやキッチンカーも設けられ、各地で開かれているフェスとはひと味違った「大人の音楽フェス」であった。

プロデューサーは、応用物理学科卒業では異端児のジャズピアニスト坪口昌恭氏が務めた。8月下旬の発売開始から4日目に他の希望者の分もまとめて買いに行ったが、全席¥8,500-の手ケットは既に8割以上が売り切れ、後部席しか購入できなかった。

坪口氏には以前に本誌に寄稿いただいており^(*)、「今回折角の機会なので『プロジェクトX・福大版』に登場していただけないか」とお願いしたところ、快く引き受けていただいた。

今回、彼の音楽活動を通して、工学系人間には縁遠い別世界を垣間見ることができればと存じます。なお、文中には専門用語が並びますので、簡単な注釈をつけています。読みづらいかもしれませんが、参考になれば幸いです。

(機械S45卒・事務局 絹谷信博)

※「畑違い男、応物での思い出」：2017年発行「工業会誌第68号」



このたび、工業会誌「プロジェクトX・福井大学版」に取り上げて頂けることになり、大変光栄に存じます。会誌の趣旨からすると畑違いも甚だしい僕ですが、この機会に自分の歩んできた音楽人生、音楽観、福井大学に在学したからこそそのバランス感などに触れてゆければと思います。

音楽少年の初期設定：血筋は争えず

僕は、福井県武生市（現越前市）にて生を授かりました。両親が音楽教師だったため、幼い頃からクラシック音楽に溢れた生活を送りました。いろんな楽器が紹介されるプロコフィエフ^(※1)の「ピーターと狼」が好きで、中でもフレンチホルン^(※2)のふくよかな音に魅了されました。母が作曲したオペレッタ^(※3)を聴きに行き、感動シーンで大泣きしたことがあったそうです。3歳の時に日常の一コマを即興的に作曲して何曲か歌ったテープが残っています。

そういえばオシメをしていた頃のある日、父親がタクトを執る小学校器楽合奏のコンサートを祖母に連れられて見に行きました。最後の演目が終わり《蛍の光》が奏でられると、父は指揮台を降り、観客も帰路につき始めました。そのとき僕は何を思ったのか、よちよちと指揮台に駆け上がり《蛍の光》を最後まで（正しく）指揮したそう。そのありさまに観客はみな客席に戻って拍手を送ったそうです。

地図や地球儀、昆虫図鑑を見るのが好きで、そういった天然や自然に思いを馳せる子供でもありました。あと、国鉄と福鉄が近くを走っていたのと従兄の影響で鉄道が大好きでした。そういった自然の中に人工物（鉄道は巨大なリズムマシンでもある）が共存している風景に魅了されていたわけですが、それが後の表現活動に影響してくるなんて、当時は考えにも及びません。

京都に引っ越し、さらに大阪へ

5歳の時に京都に引っ越しをしました。武生のような自然が周りにない地区で、アスファルトと陸橋を走るくらいしか楽しみがなくなりましたが（円山

公園は大好きでした）、アパート暮らしになってスタジオっぽい音楽室ができたこともあり、ピアノをやりたいと親に宣言したのです。

更に引っ越しがあり、PL学園小学校に入学、大阪暮らしとはいえ開拓地のような地域で、生活環境に自然が戻りました。クラシックピアノは母親から細々と習い続けていましたし、両親の運営する合唱団にも所属していましたが、小学時代は遊び（野球、ローラースケート、囲碁etc.）に夢中で、ピアノはそっちのけでした。特撮ヒーローものにも夢中になり、中でも人造人間キカイダーの人間とロボットが少々バグりながら共存するシチュエーションには魅了されました。それもその後の音楽観に影響します。小学5年生の頃、とあるピアノリサイタルでショパンに感銘を受け、1年半ほど大阪芸大のピアニスト教授のレッスンを受けました。

中学で吹奏楽部、バンドとシンセで音楽熱再燃

ところが中学に入ると同時に一旦ピアノはやめてしまいます。近所の自由な土地で父親と畑仕事をするのが趣味となり、誕生日プレゼントに鍬鋤をもらったほどです。ある春の日、さっさと帰宅して畑に出ていたところ、吹奏楽部の先輩が「坪口、おまえホルン好きやろ。楽器用意して待ってるんやから来いや」と畑まで勧誘に来て、吹奏楽部に入部させられました。音楽から離れなかった人生の岐路はこの瞬間！かもしれません。

吹奏楽部は中高合同だったので、先輩たちから知らない曲や流行の音楽を教わり、感性も養われていきます。部の伝統として、市販の譜面がない曲をめぼしい学生が耳コピして吹奏楽に編曲するというのをやっていた、僕も率先してアレンジを担当しました。高校野球部がほぼ毎年甲子園に出場するので吹奏楽部も応援で大忙し。また文化祭のステージで軽音楽部と合同で歌謡ショーをやるので、そこでもアレンジに明け暮れ、もちろんピアノ＆シンセも自分で演奏しました。あの頃の経験は音楽大学での演習課題に匹敵するものだったと思います。

※1 ロシアの作曲家。20世紀の大作曲家

※2 ホルンの代表格。柔らかくも荒々しくも表現できる

※3 簡素化された小さなオペラ

親譲りの先生気質

話が前後しますが、中2の頃、吹奏楽とは別にクラスメイトとバンドをやろうということになりました。LM楽器^(※4)に魅了されてしまったわけです。'70年代後半ですからThe VenturesやThe Beatlesに始まり、Billy Joel、邦楽ではゴダイゴ、ツイスト、サザンオールスターズなどをコピーして練習していました。クラシックと違って譜面通りではなく、コードを用いて自由にバリエーションできることとビート感が魅力でした。耳コピが苦じゃなかった僕はキーボードだけでなくギター、ベース、ドラムのパートも聞き取ってメンバーに教えたりしていましたね。親譲りの先生気質はこの頃から現れていたのでしょうか。バンドをやることで友人も増えてきました(それまでは畑と鉄道模型がトモダチでしたから)。

富田勲さんのシンセサイザーによるクラシック音楽にも夢中になりました。ドビュッシーの『月の光』は世紀の名作ですね。そんな折、大阪芸術大学の音楽工学科に、日本で唯一富田勲さんのシンセサイザーをメンテできる先生(塩谷宏教授)がいらっしゃると知り、中3の夏、両親とともに大学の研究室を訪れました。塩谷教授から「ピアノの腕前は心配ないので、数学と物理に力を入れて勉強しておくべき」と言われ、音響に関する推薦本を何冊か教えて頂きました。

高3で帰郷。ジャズ狂少年、憧れの人に！

高校生になると、音楽の好みもロックからよりテクニカルなフュージョン^(※5)やクロスオーバー^(※6)にシフトしてゆきます。渡辺貞夫(sax)さんの影響でRichard Tee (Key)^(※7)やDave Grusin (Key)を知り、Crusaders、Quincy Jones (arr)^(※8)、Marcus Miller (b)^(※9)、Steve Gadd (ds)^(※10)にハマりましたね。一方で山下洋輔(p)さんらのフ

※4 Light Music : クラシック以外の軽い雰囲気のある楽曲。軽音楽
※5 ジャズとロックなどをミックスしたジャンル
※6 異なるジャンルが融合し、洗練された音楽スタイル
※7 キーボード奏者
※8 アレンジャー、編曲家
※9 ベーシスト。低音の演奏者

リージャズ^(※11)に傾倒したりYMO^(※12)にも魅了され、構築と脱構築の双方に揺さぶりをかけられました。

さて、高校3年に上がるときに両親は音楽教師を退職し、家族全員で帰郷することになり、僕は北陸高校に転入しました。そこでジャズ狂少年としては一世代の経験をします。山下洋輔さんのコンサートが福井で開催されることを主催グループの一員であった高校の先生から伺い、ご本人と会って話す機会を作っていただきました。更には「君のピアノを聴かないことには始まらない」とのことで、学校の音楽室まで出向いて頂いた山下さんの前でピアノを弾き、アドバイスを受けることができました。『ジャズをやって良い!』というお墨付きを頂いた瞬間です。



東京ザヴィヌルパッサ with 山下洋輔 at 大阪Bridge (2003年12月13日)

福井大学入学！学外では？コンテストでは？

両親が地元福井県で児童合唱団を設立する準備に奔走している中、僕は実家から通える福井大学工学部のなかでも適性に合った「応用物理学科」を志望し、無事入学いたしました。福大応物入学と同時に、地元の社会人AORバンド^(※13)「楽天」に加入しました。そのバンドでヤマハライトミュージックコンテスト1983にエントリーしたところ福井県で優勝、名古屋地区でも優勝、全国大会ではベストキーボーディスト賞を頂きました。それもあっていろんな方から誘っていただく機会に恵まれました。

※10 ドラムなど打楽器の演奏者
※11 従来の形式を打破、即興スタイルのジャズ
※12 イエロー・マジック・オーケストラ、日本が世界に誇れるテクノグループ
※13 洗練された大人向けロックで、ジャズや他のジャンルを融合したサウンド

好みのミュージシャンもこの頃になるとWeather Report、Herbie Hancock、Pat Metheny、Stevie Wonder、日本人では渡辺香津美さんやナニワエキスプレスに憧れましたね。

一方、大学での物理は高校までとは比べものにならないほど難しく、偏微分や量子論には悩まされました。4年生になると原子力学の権威・岡部茂教授ゼミに入り(4月にチェルノブイリ事故)、国見岳に籠もったり校舎の屋上でアドバルーンを上げたりして、自然放射線の測定に参加しました(岡部教授はなんと一度僕のライブに足を運んでくださったのです)。梅雨明け頃、一週間の測定を終えて国見岳から下山したその足で金沢のジャズコンテストに出場、ソロピアノを披露したところ優勝しました。練習不足でしたがピアノを弾ける喜びに溢れていたんでしょう。それなりに大学の勉強もがんばり大学生活もエンジョイしましたが、校門を出るともっぱらセミプロ・ミュージシャン気分で、CM音楽を創ったりFM福井に出演したりイベント演奏をしたり、多いときは20種ものバンドやプロジェクトに参加していました。よく卒業できたなあと思えますが、その後の人生において大きな自信につながったことは事実です。

お世話になりました

大学時代特にお世話になったミュージシャンを紹介します。CM音楽やイベント演奏で一緒にしたギタリスト新保たかし(アリス)さんには、音楽を職業とする精神をたたき込まれました。またドラマーのBeeちゃん(清水清さん)には、他人のコピーではなく柔軟な発想を持つことの大切さを教わりました。自称JBのオルガ植田さんからは、エンタテインメントの楽しさとユーモアをもらいました。そして、上京するかどうか迷っていた僕にかけてくれた「ジャズ現場の匂いというものがある。東京やNYでそれを嗅いでこないことには始まらない」という白井敦夫(Alt.Sax)さんの言葉は決定的でした。

上京、刺激的な出会いとオリジナリティの追求

実は大学に入学した春から、駅前の“松木屋さん”でロックピアノの講師を務めていたんです。松木屋

社長さんの紹介もあり、1987年3月に上京してすぐ、首都圏の楽器店で講師を務める仕事は得られましたが、それ以外は暇でしょうがないのでせっせとオリジナルを作曲しDemoテープ^(※14)作りに励みました。バブル期であったため、イベント演奏や制作の仕事は徐々に増えてきたので助かりましたが、それでも上京した目的は、音楽で稼ぐことよりも「自分なりのジャズ音楽を創ること」。知り合った仲間とバンドを結成し、最初は原宿の歩行者天国から演奏を始め、青山円形劇場でコンサートを開催したりしていました。

上京して変わったことは、クロスオーバーやフュージョンから離れたこと。新たに知り合う友達がことごとくブリティッシュ系^(※15)だったりレゲエ^(※16)やパンク^(※17)を好んでいたりと、テクニック云々よりもハイセンスでやんちゃな音楽を聞くきっかけになりました。当時の流行も関係していますが、ワールドミュージック^(※18)に傾倒し、第三世界的な音楽にも興味を持つようになりました。

上京2年目の'88年、池長一美(ds)さんとユニット結成。その流れで内橋和久(gt)さんとも出会いました。すでにジャズを新たなステージに発展させる腕前とセンスを持ち合わせていたお二人には大いに刺激されました。その夏、初めてボストン(パークリー音楽院)^(※19)とニューヨークを訪れ、初めての海外&本場のジャズに圧倒されまくって帰国しましたね。

同じ年の秋、友人の紹介で今堀恒雄(gt)さん率いるTipographicaというバンドを見に行きましたが、あのとときの衝撃を忘れません!拍子がぐにゃぐにゃで、キーボーディストもまともに弾かずサンプラー^(※20)を操作していたり、ニューウェーブ^(※21)なのかプログレ^(※22)なのか、ロックでもジャズでもない音楽。ジャズの形式にこだわっていたところ

-
- ※14 製作中のデモンストレーションテープ
 - ※15 ピーター・ガブリエルやケイト・ブッシュ等
 - ※16 ジャマイカで生まれたポピュラー音楽
 - ※17 NYやロンドンで生まれたロック音楽
 - ※18 西洋以外の世界各地の民族音楽
 - ※19 世界最高峰の現代音楽大学
 - ※20 音を録音・再生して演奏する装置
 - ※21 パンクロックに色んなジャンルを融合させた音楽
 - ※22 プログレッシブ・ロックはイギリスに登場した革新的なロック

ガツンと一撃を食らったようでした。そこでサクスを吹いていたのが菊地成孔 (sax) さん。ソプラノの音が聞いたことのない美しさでMC^(※23)は抱腹絶倒。思い切って共演を申し込みました。

ジャズの中でも特にアグレッシブ^(※24)な姿勢で独自の音楽を志すミュージシャンにとっての登竜門は、大学時代から目標にしていた新宿PIT INNでした。僕は1989年の暮れに菊地成孔セッション^(※25)で出演したのが最初ですが、1990年の春から自分のリーダーバンドで毎月出演する機会を得られました。ジャズスタンダード^(※26)の形式に似せつつ、より自分の歌心に即し、リズムに工夫のあるオリジナルを掲げていました。

非ジャズ、ジャンルを超えた経験

ヤマハポピュラーミュージックスクール(PMS)で教えていた4年間で、こんな出会いもありました。恰幅の良い中年男性がキーボードを習いに入会してきたと思ったら、日本大学芸術学部の教授で音楽家の丹羽勝海さんでした。シンセ^(※27)やポップス系^(※28)の音作りに興味があるとのことでしたが、こんな方に教えるなんてと恐縮していたら、なんと自身の音楽リサイタル^(※29)に組曲を作曲して欲しいとおっしゃるのです。僕に?!何かクラシック畑ではないセンスを感じ取ってくださったのだと思いますが、3年連続で丹羽さんの公演に参加し2つの組曲を作曲/共演。その創作過程で、様々なコンサートや映画も鑑賞し知見が広がりました。同時期'91年の春には、福井大学時代にバンド活動を共にした友人のついでケニアを訪れました。この一連の経験は、ジャンルの枠にとらわれないセンスを学ぶ貴重な機会でした。

音楽の話が出ましたが、両親の運営/指導する「福井ソーベ児童合唱団」^(※30)はウィーンのコンクールにて特別大賞を受賞するなど、息子ながら拍

手を送りたくなる躍進ぶりで、大阪時代怒りっぽかった父親がとても穏やかでのびのびと教育に当たっているのがホッとした気分でした。そんな両親のおかげで、ほぼ1年おきに海外公演(アメリカ、ブラジル、ニュージーランド、中国、イタリア、フランス、ドイツ、ウィーン、ハンガリー、台湾)に同行し、幕間にジャズピアノを披露したり、ある時期から合唱向けの組曲をアレンジして伴奏したりしたのも、他ではできない貴重な経験でした。

思えば'90年代は、ジャズ界でエポック・メイキング^(※31)なものが少ない時代でした。ブルックリン派^(※32)なんていうブームはありましたが、メロディだけが複雑で決定的な魅力に欠けるものでした。一方で坂本龍一さんのワールドミュージック指向に憧れたり、The Beatles再評価、Frank Zappaやカンタベリー派^(※33)のHenry Cow、Phillip GrassやSteve Reichのミニマルミュージック^(※34)に夢中になるなど、非ジャズな刺激をたくさん受けました。ハードコア・ジャズロックバンドP.O.N.(植村昌弘dsリーダー)に加入し、旧東ドイツツアーをおこなったことで、無調変則拍子^(※35)の感覚が鍛えられました。前述Tipographicaから菊地さん、水谷浩章(b)さん、外山明(ds)さんを自分のバンド「坪口昌恭PROJECT」にお誘いしていたこともあり、彼らの影響でアフリカ土着音楽のポリリズム^(※36)を研究するなど、リズム、コンポジション^(※37)、コンセプト^(※38)といったキーワードを重視する日々でした。

アカデミックな現場 VS アグレッシブな演奏活動

そんな折、ひょんなことで尚美学園短期大学の音楽情報学科でコンピュータミュージック(DTM)^(※39)を

※ 30 坪口氏の両親が指導し、ウィーン世界青少年音楽祭で2度特別大賞を受賞した福井県の有名な合唱団。「叱らない指導・ほめて伸ばす」をモットーとし、現在の「福井キッズコースファミリー」に引き継がれている

※ 31 新時代を切り開く画期的なもの

※ 32 NYブルックリンを中心に広まった現代的で高度な即興演奏

※ 33 英国カンタベリーから広まった音楽

※ 34 音の要素を最小限に抑え、単純なパターンを反復させる現代音楽

※ 35 長調・短調の規則性が無く、拍子も不規則

※ 36 異なる拍子やリズムを同時に演奏する

※ 37 音符やフレーズを組み合わせて曲を作る

※ 38 制作者の意図、テーマ

※ 39 PCや電子機器を使って作曲、演奏をする

※ 23 ライブでマイクパフォーマンスをして、会場を盛り上げる

※ 24 挑戦的・独創的

※ 25 楽譜や練習無しに即興で演奏する

※ 26 広く演奏され、知られている楽曲

※ 27 電気信号を用いて音を合成する楽器、シンセサイザー

※ 28 広く大衆が親しみやすく、覚えやすいジャンル

※ 29 ピアノ伴奏と共に歌を披露する独唱会

教える話が来ました。それまで音楽大学はクラシックが主流でしたが、徐々にDTM教育も導入され始めた頃、僕のようなクラシックもパソコンも専門的にやってこなかったけれど、独自の創作に活用し模索しているタイプは適任だったようです。しばらくの間は演奏活動と専任教員の両立に葛藤がありましたが、今となっては実にラッキーだったと思っています。ジャズやポップスの音楽理論は、福大工学部で培った理数的発想と大いにリンクするものがあります。教育研究に携わることで、何より自分が勉強し続けなければならないし、教え子たちは立派に巣立っていき音楽のシーンを担ってゆく者もいる。尚美は2000年に四年制大学に改組、そこからこれまた日本の音楽大学になかったジャズ教育にシフトしてゆきます。僕はなんだか、音楽教育界でも新たな時流を泳いでゆく星の下にいるのかもしれない。

'99年に、Macintoshコンピュータで走る自動変奏ソフトM^(※40)にリズム隊を担わせる新ユニット「東京ザヴィヌルバッハ」(TZB)を菊地成孔氏と始動します。それまでもリズムマシンを使って演奏するスタイルに親しんできましたが、一步踏み込み、機械も意思を持ってセッション^(※41)しているようなスタイルを生み出しました。幼い頃キカイダーに憧れた感覚が宿っているのだと思います。

後に五十嵐一生(Tp)くんも加入し、エレクトロニクスを活用したポスト・マイルス、ポスト・ウェザー的な即興性の高い音楽が、コアな音楽リスナーの中で話題になりました。今思い返せば、新しさを求めるあまり前のめりになり、安定したエンタテインメント性を提供できなかった反省はありますが、僕の活動の中で「坪口と言えばTZB」という理数系型オリジナリティをアピールできたと自負しています。サンプリングありきの音楽だったので、その反動でより有機的なサウンドコラージュ^(※42)を求め、モジュラー・シンセサイザー^(※43)にも手を染めはじめました(こちら益々キカイダー)。

※40 プログラム通りに再生するだけでなく、設定に基づいてランダムに変奏・生成する

※41 楽譜や練習無しに即興で演奏する

※42 異質感のある音声や音を組み合わせる手法

※43 電子楽器で、普通のシンセサイザーよりも独創的で複雑な音色が作れる



坪口Modular Solo at 下北沢No Room For Squares (2022年7月19日)

ただここでも妙なねじれが起こります。大学でジャズ、中でもビバップ教育^(※44)に力を入れる方針となり、当時の主任教授が懇意にしていたピアニストBarry Harris氏を客員教授としてお迎えすることになりました。期せずしてジャズ界の保守派レジェンド^(※45)であるバリー氏と一緒に教える羽目になった僕ですが、バリー氏の紡ぎ出す音が美しく心底感動したので、とても光栄でしたしチャンスでした。バリー氏の提唱するメソッド^(※46)はロジカル^(※47)かつシンプル^(※48)で、目からウロコが落ちることの連続。僕も30代半ばにしてようやくスタンダードジャズ^(※49)の面白さに目覚める有様でしたが、彼との出会いは一生の宝です。一方で、TZBやメンバーとして参加したDCPRG^(※50)は、バリー氏の最も嫌う(笑)マイルス・デイビス^(※51)の進化形を標榜したアグレッシブな音楽。大学でビバップに取り組んでいる学生が僕のライブを観に来て混乱していましたね。

※44 NYで生まれ、技術や芸術性を追求したモダンジャズの源流となる音楽

※45 巨匠

※46 教育法・指導法

※47 論理的。楽曲が音楽理論に基づいて緻密に設計されている

※48 単純明解な方法論

※49 繰り返し演奏され、時代を超えて愛される定番曲

※50 菊地成孔が結成した先鋭的なバンド

※51 米国出身のジャズトランペット奏者、作曲家

東京とニューヨーク、若手との出会い

2000年代は、菊地成孔氏との共同プロジェクト三昧で、TZBやDCPRGをはじめ、Quintet Live Dub、Dub Sextet、UA×菊地成孔、映画音楽他ほとんどのプロジェクトに参加しました。また、当時お世話になっていたレーベルewe Inc. ^(※52) からニューヨーク録音の坪口ソロ作品をリリース ^(※53) することになり、キューバ勢ミュージシャン (Horacio Hernandez、Yosvany Terry、Pedro Martinezほか) とおこなったレコーディングはあまりにもパワフルでしたが、自然に自分らしさを発揮できる一時でした。一方で、大学行事として毎年NYマンハッタンに学生を引率し、音大ジャズフェスに出演したり現地のジャズシーンを満喫する機会が十数年続きました。学生たちも刺激受けまくりでしたが、教員である僕もNYに人脈ができ、音大で教鞭を執っていたScott Reeves (tb) さんらと数年にわたってNYのジャズクラブに出演するなど親交が続いています。



NYでの坪口リーダーアルバム・レコーディング時(2004年8月16日)

2010年代に入ると、Jose James (vo) の出現やRobert Glasper (p) の台頭がジャズの地図を塗り替えたと言えるのではないのでしょうか。ヒップホップ ^(※54) とジャズを融合しただけでなく、ポップなコード使いでありながらメジャーとマイナーを交換するような斬新なハーモニー感でも耳を釘付けにしました。更にはそれまで分断されていたような音楽ジャンルの垣根が取っ払われ、世界中の音楽を同列にシエ

※ 52 大手の系列に属せず、独立して制作していたジャズレコード会社

※ 53 新しい音楽作品を発売・発信する

※ 54 NYの黒人が生み出した音楽ジャンル・文化。ラップ、ブレイクダンス等の4大要素で構成

アして良いというムードが音楽界を改革したように思います。そうなってくると、日本でもグラスパー ^(※55) をはじめとするニュージャズ ^(※56) にダイレクトに影響を受けた世代と出会うことになります。それまでMで稼働していたTZBを人力で演奏したいと思わせたのが、当時東京藝大に入学したての石若駿 (ds) でした。石若くんやモノクル角田隆太 (b) くんらの周りに集まる若手ミュージシャンの質の高さには驚愕すると同時にワクワクさせられましたね。



東京ザヴィヌルパッサ・リユニオン at Blue Note Tokyo (2021年11月6日)

男50歳から！そして花の60代へ

50歳前後は今までにないほどいろんな方々から誘いいただきました。ジャズやインプロ ^(※57) のセッションだけでなく、ボサノバ ^(※58) に精通するギタリスト／プロデューサー伊藤ゴローさんとの仕事がきっかけで原田知世さんのツアーに参加したり、細野晴臣さん、清水靖晃 (sax) さん、坂本美雨 (vo) さん、土岐麻子 (vo) さんらと共演することができました。YMO人脈や渋谷系の一派はとにかくオシャレでハイセンス！

一方で、武生の実家から目と鼻の先にあるジャズクラブ「Ragtime Classics」にて、正月やお盆に地元ミュージシャンとセッションすることが恒例となりました。アマチュアの方々との余興と思われるかもしれませんが、いえいえ、こういった活動が自分の

※ 55 アメリカのジャズ・ピアニスト、音楽プロデューサー

※ 56 ジャズをもとにヒップホップなどの他スタイルがブレンドされた音楽

※ 57 即興演奏

※ 58 ブラジルで生まれ、サンバのリズムをベースに心地良いサウンドが特徴

音楽性を見つめ直す大きなきっかけになっているものです。2025年に始まった「JAZZ井」も、こういった郷里での活動があってこそお声がけいただいたプロジェクトなんです。

2018年には、当時まだ20代で非ジャズだからこそその魅力を感じた西田修大(gt)、大井一彌(ds) (今や彼らは日本のハイセンスなJ-Popシーン^(※59)で超引っぱりだこ!)と新バンドOrtanceを結成。ジャズの手法を封印することで得られた別次元の自由さと美意識の共有には自分でもワクワクし続けています。オルタナ・クラブ・ロックな魅力で徐々にファンを獲得し、毎回ベストライブ更新中!



Ortance at 表参道Wall & Wall (2024年11月24日)

サポート活動はともかく、自分が主体となる音楽活動では、全部が一律に揃わない、中にはベクトルが異なる、もしくは全てを把握していないメンバー

※ 59 日本のポピュラー音楽の主流で、歌謡曲に代わり洋楽的な感性と日本語の詩情を融合したジャンル

がいるということも大切にしています。それはかつて自然界と人工造形物が共存し調和している風景に魅了されていた坪口少年の趣向が生きているからこそその美意識なのかもしれません。

さて、60代は「JAZZ井」の音楽監督を仰せつかりました。2025年11月22日に開催された第一回目にお越し頂いた方々、ありがとうございました。東京でも実現できないような組み合わせの画期的なコンサートになったと思います。

「JAZZ井」という名称には、福井で開催するジャズという意味だけでなく、「ジャジー=ジャズっぽい」というニュアンスも込められています。伝統的なジャズに敬意を払いながらも、ジャンルを超えたあらゆる音楽のエッセンスを取り込む懐の深さこそがジャズ魂。第二回目の告知はまだですが、一般的なジャズのイメージとは違う音楽でも、無国籍料理のように楽しんでもらえたらうれしいです。



JAZZ井フィナーレ at ハーモニーホールふくい(2025年11月22日)

【主な音楽活動の記録】

- 1987年 福井大学工学部応用物理学科卒業後、上京。
- 1990年 新宿PIT INNのレギュラーピアニストとなり「坪口昌恭PROJECT」等で出演
- 1999年 「東京ザヴィヌルバッハ」始動。2020年までに11枚のアルバムを発表
- 2000年代 「DCPRG」「UA×菊地成孔」「菊地成孔Dub Sextet」でブルーノート各店、フジロックフェスティバル他、多数の公演に参加
- 2005年／2006年 ニューヨーク録音の坪口リーダー・アルバム2枚発表、「坪口昌恭TRIO」リミックス・アルバム発表
- 2011年 映画「Lily」の音楽制作
- 2013年 モジュラーシンセサイザーによるソロアルバム発表
- 2013年～2021年 原田知世の3部作とツアー含む、伊藤ゴロー Produce作品に参加
- 2015年～2017年 大塚広子Produce「RM jazz legacy」に参加。4枚のアルバムを発表しフジロックフェスティバルにも出演
- 2016年 アニメ「ReLIFE」の劇伴制作
- 2018年 西田修大、大井一彌と結成した「Ortance」始動。3枚のアルバムを発表し、現在も精力的に活動中
- 2024年 「Masayasu Tzbooguchi Trio MⅢ」でのアルバム発表
- 2025年 TOKYO LAB 2025 バンドマスター、「JAZZ井」プロデューサーを務める

その他、akiko、五十嵐一生、坂田明、上妻宏光、JUJU、小泉今日子、宇多田ヒカル、けもの、ものんくる、崎山蒼志、大友良英、他のサポート/レコーディングから即興セッションまで。
著書に『神曲のツボ! 「カッコいい」の構造分析』。